

粟、豆類等、これはすべて馬糧として貨物廠にたくわえられていたものです。それがなくなると一きれの黒パンと飯盒のふた一ぱいの塩汁、これで栄養失調にならないのが不思議なくらいです。私は幸せなことにハラシヨウラボウターとして帰国第一陣にはいつて、比較的早期に帰還出来ましたが、今、當時をふり返って思い起こすとき、日本人として最も恥すべきことは、自分の保身のためには、平気で仲間さえも裏切り、ソ連側に通報した人間が多数あったこと、そのため、どれだけ我々の苦しみが増加したかはかり知れないのです。

あの北斗七星のましたでの抑留中には想像出来なかった現在の我が身の幸福をありがたく思うとともに、せめて私達の元氣なうちに、収容所の裏山などに大きな穴を掘って、うめられている多くの戦友達の遺骨を収集して、それぞれの故郷の土に葬ってやらねばと今はただそれだけを思う毎日であり、年老いていく我々にとって焦燥の感、ひとしおの昨今です。

格子なき牢獄

東京都 石山 権 作

部隊は新京で終戦を迎え、ある所でソ連の武装解除を受く。そして公主嶺に集結する。しばらくして黒河省に連れてこられ、そこで十二月まで物資運搬の労に服す。十月に入ると寒さもぐんと強まり、十二月には黒龍江が完全に凍ってしまった。そして我々も氷上を渡り、ウラゴエチエンスクに連行さる。そこから列車に乗る。どこへ連れていかれるのか皆目見当もつかず、不安の気持ちでいっぱいだった。

列車内は、中央に一つ大きなストーブが据えつけられ、両側が段になっていて、スシ詰状態で寝起きするのがやっとだった。最初はたくものもたくさんあったので、ストーブが真っ赤になるまでたいた。しかし、熱は上部のみに回り、汗をかくほど暑かったが、下部両側は全く冷蔵庫で、鉄飯には氷の花が咲いていた。

また、大軍輸送のため、途中たくものが間に合わず、全くない時もあり、防寒衣に固くくるまり、必死に耐えたこともある。そんな中で多く風邪を引く者も出て、肺炎になり、助かる命も助からなかった。死体は停車時を待ち、雪原へ捨てていった。また列車内でのシラミにもほとほと閉口した。何しろ防寒帽の毛先まで這い出してきた。

四十数日、飢えと寒さとの戦いから、ようやく目的地に着いた。そこは中央アジアのトルクメン地区、クラスノボドスクであった。収容所は砂漠の真ん中にあり、兵舎も地下であった。ここで三年十か月、苦勞の生活を送ろうとは誰が予測しただろうか。

ベッドはタル木を打ちつけ二段式四人一組である。電気もないので、ランプを使う。翌朝の点呼で先発隊が来ているのに気づく。航空隊と病院関係の将校ばかりであった。その中に納谷少佐殿がおられ、この第四十四収容所の最高責任者となる。

食糧は野菜、魚類、すべて乾燥物と燻製物。水も貨車で運ばれてくる。オートミルの雑炊食事が多く、黒パン

と週一回の米飯であつた。二、三キロ離れたところにカスピ海があり、その向こうはイラン。そんなせいか夏はとても暑く、雨もあまり降らないので、ハエが物凄く多く、食物などに群がってきた。

ここでの作業は主として建設作業。砂漠の中に街をつくる計画らしい。連なる山々は太谷石に似てやわらかく、そこから掘り出し、タポールで刻み、積み上げていった。兵舎もビルも劇場も、すべて人力の重労働であつた。それでもノルマが上がらないと、食事も少なく、みな無理をしてノルマを上げた。二年目ごろには氣候風土の違いやら、労働と食事の不釣り合いから、多くの栄養失調や病人が続出した。

ほとんど無給に等しい。二年目より赤化教育が盛んになり、軍国的なものを次々排除していった。まず隊長の解任、階級の廃止、中隊を団に替え、批判会等も毎日持たれ、うかつに口に出すと、直ぐつるし上げを食った。革命映画もよく観せられ、早く赤化思想にならなければいつまでも帰さぬと言われ、みな右へならえと従う。

いつ帰れる当てのない日々ほどつらいものはなかつ

た。二十三年にやっと解放され帰すと知らされたが、本当に帰れるのか信じられなかった。

ナホトカに來ると、各所の兵でふくれあがり、毎日革命歌を唄い、順番を待つ。十月も終りころ、やっと乗船できた。ソ連服を着、毛ほどの遺品も許されなかった。船内では朝まで二派に分かれ、激論を交わす。舞鶴港に來て初めて実感がわく。

入隊してより五年十か月、日本の土をようやくにして踏む。舞鶴での政府の報酬は、夏冬上下の衣類と千円であった。これより裸一貫で生きて行かねばならぬ！ソ連帰りと白い目で見られ、三年ほどは思うように職にもつかなかった。

最後に異国の地に眠る同胞を偲び、筆を擱く。

タシケント抑留記

福岡県 日野 治水

我が樺隊二百人が炎天下のタシケント第五收容所に入

所したのは昭和二十一年七月下旬であつたと思う。この第五收容所は市街地からトラックで約三十分くらいの郊外で、先に大西隊約三百人、川崎隊約二百人が入所しており、建築作業が主力、他に機械工場や道路建設等にも出役していた。入所と同時に前職の調査があり、私は左官で登録し、休む間もなく翌日かられんがが積み作業に従事した。

タシケントは中央アジア南部の大平原で、農業商工業の盛んなウズベツク共和国の首都であるが、入所当時は荒廢がひどかった。緯度は青森県くらいと思ったが、大陸性氣候が強く、五月中旬から九月中旬まではほとんど降雨はなく、特に七、八月は連日四十数度の酷暑で草原地帯は砂漠となる。積雪は多くないが、十月下旬から翌年三月下旬までは零下十度、三十度の酷寒凍土というような所であつたが、シベリア鉄道沿線の收容所に比べ、嚴冬の期間が短かつたことが不幸中の幸いであつたと思う。夏は熱く冬は泥が凍って左官作業は苦勞した。特に粗惡些少な給食と南京虫には困つた。昭和二十二年夏ころからタシケントでも民主化運動が始まり、社会主義共